



食材としての孔雀 — 漱石における想像力の一面

塚 本 利 明

(一) 迷亭の「年始状」

『吾輩は猫である』(二)は、「吾輩は新年来多少有名になつたので、猫ながら一寸鼻が高く感ぜらるゝのは難有い」という言葉で始まる。他方、猫の主人苦沙弥先生は、正月早々、「文芸家」越智東風の訪問をうけ、「ト、チメン、ポー」を「種に使つて」迷亭にかつがれた話をきかされる。東風が辞去した後、先生は東風をからかった迷亭の「年始状」が書斎の机に置かれているのに気がつく。この「年始状」は、「新年の御慶目出度申納候」と「いつになく」真面目な挨拶が始まるが、そのうちに「東風子にト、チメン、ポーの御馳走を致さんと存じ候処、生憎材料払底の為め其意を果さず、遺憾千万に存候」といつもの迷亭らしい調子に変わっていく。次いで、「今度御光来の節は」せめて「ト、チメン、ポー」でもご馳走したいが、「然しト、チメン、ポーは近頃材料払底の為め」間に合わないかもしれないので「其節は孔雀の舌でも御風味に入れ可申候」と、いかにも気をもたせるような言い方に移るのである。

迷亭によれば、「此孔雀の舌の料理は往昔羅馬全盛の砌り、一時非常に流行致し」たものである。「降つて十六七世紀の頃迄は全欧を通じて孔雀は宴席に欠くべからざる好味と相成」り、「レスター伯がエリザベス女皇をケニルウオーに招待致し候節も慥か孔雀を使用致し候様記憶致候。有名なるレンブランドが画き候饗宴の図にも孔雀が尾を広げ

たる儘卓上に横はり居り候」と、迷亭は続ける。ところで、「歴史家の説によれば羅馬人は日に二度も三度も宴会を開いたが、「日に二度も三度も方丈の食饌に就」けば「如何なる健胃の人」でも「消化機能に不調を醸す」にきまつてゐる。そこで彼らは「贅沢と衛生とを両立せしめんと研究を尽し」た結果、「不相応に多量の滋味を貪ると同時に胃腸を常態に保持する」ための「秘法を案出」した。それは、「食後必ず入浴」し、「入浴後一種の方法によりて浴前に嚥下せるものを悉く嘔吐し、胃内を掃除」した後「又食卓に就き、飽く迄珍味を風好し、風好し了れば又湯に入りて之を吐出致」すという方法である。「此際吾人西洋の事情に通ずる者が古史伝説を考究し、既に廃絶せる秘法を発見し、之を明治の社会に応用致」したら、「所謂禍を未萌に防ぐの功德にも相成る」だろう。よつて「此間中よりギボン、モンセン、スミス等諸家の著述を涉猟」しているが、「未だに発見の端緒も見出し得ざる」状態である。「就てはさきに申上げ候ト、チメンボ、及び孔雀の舌の御馳走も可相成は右発見後に致し度、左すれば小生の都合は勿論、既に胃弱に悩み居らるゝ大兄の爲にも御便宜かと存候」と、迷亭の「年始状」は終る。つまり、越智東風が「ト、チメンボ、」でかつがれたと同じく、苦沙弥先生は「孔雀の舌」で一杯くわされたのである。

この「年始状」を出した迷亭は、「アンドレア、デル、サルト」が写生の大家だという話を「捏造」して苦沙弥先生をからかったように、「好加減な事を吹き散らして人を担ぐのを唯一の樂にして居る男」である。だとすれば、「孔雀の舌」も同じように迷亭の「捏造」ではあるまいか。私は、長い間そう思いこんでいた。ところがその後、仮に「捏造」だとしてもそれなりの根拠があるのではないか、という考えが脳裏を去来するようになった。どんな冗談にもせよ、まったくのゼロから捏造することは困難だからである。以下、この問題について若干の考察を試みたい。

(一) 「孔雀の舌」の周辺

「孔雀の舌の料理は往昔羅馬全盛の砌り、一時非常に流行致し」とという説に近い記述は、比較的容易に見つける

ことができる。一例をあげれば、ローマ皇帝ウイテリウス（在位六九年一月―十二月）は「べらの肝臓、雉と孔雀の腦みそ、フラミンゴの舌、やつめうなぎの白子（傍点原文）」を混ぜあわせて食べたという¹。またペトロニウスの作といわれる『サテュリコン』では、饗宴の主催者トリマルキオンが「鶏の下に孔雀の卵を」置かせて、会食者たちを驚かせている²。しかし、「孔雀の舌」に関するかぎり、それが「一時非常に流行」したという資料はまったく見出すことができなかった。

本場に「孔雀の舌」を食べた皇帝がいたのだ、と知ったのは、二〇〇六年に「西洋古典叢書」の一冊として出版された『ローマ皇帝群像2』に目を通したときである。ここに収録された「アントニヌス・ヘリオガバルスの生涯」の中で、「この者〔ヘリオガバルス〕は（中略）しばしば、アピキウスをまねして、ラクダのかかとや生きている鶏から切り取った鶏冠、孔雀やナイチンゲールの舌を食べていた。というのも、これらを食べた者は、疫病から免れるといわれていたからである³。」という一節を目にしたとき、私はこれが「孔雀の舌」のタネだ、と思った。ところがその後、これより十五年も前に出た塚田孝雄著『シーザーの晩餐』が右の部分と同じ所を引用していることを知って、一種の驚きと落胆とを覚えたのである⁴。特に吃驚したのは、この書物が『猫』との関係で「孔雀の舌」に触れている、ということだった。すなわち塚田氏は次のように述べていたのである。

ローマ人の宴会といえ、たいいていの人がクジャクの舌と入浴嘔吐の術を脳裏に浮かべる。そうして昔読んだ漱石先生の『吾輩は猫である』の一節をなつかしく思い出すことであろう。／あの小説には苦沙弥先生、迷亭、東風などという喰い意地の張った連中が登場し、トチメンボー、ナマコ、フグ、タコなどの話が交わされるが、迷亭さんがのどかな新年の賀状に、クジャクの舌でもご馳走したいと書き出して、胃弱でしかも健啖な苦沙弥先生に一杯喰わす件は、とりわけ印象深いものであった。／ところでローマ人は本場にクジャクの舌を食べたのだろうか。これまで日本で出版されたローマの食事についての書物には、食べたとは述べていないようである。／しかし、『後期皇

帝伝』を読んでゆくと、アエリウス・ラムブリディウスの撰になるという『ヘリオガバルス伝』の中に、／彼はアピキウスを真似て、しばしばラクダのかかと、生きている雄鶏から切り取ったとさか、クジャクと夜鶯の舌を食べたが、これはこのようなものを食べると疫病にかからない、と言われていたからであった。／とあり、さらにボラのはらわた、オウムとキジとクジャクの頭をたくさんの大皿に盛って廷臣に振る舞ったとか、飼い犬をフオアグラで養った、といった話が続く。／（中略）ところで漱石の種本は何であつたろうか。恐らくスミスの『古代人名学辞典』もしくは、ボーンズ叢書に収められたブリニウスの『博物誌』の訳注によつたものであらう⁵。

両者を比べてみると、『ローマ皇帝群像2』が「この者はしばしば、アピキウスをまねして（以下略）」としている部分は、塚田氏が「彼はアピキウスを真似て（以下略）」とした部分とほとんど同一である。というのも、「西洋古典叢書」が『ローマ皇帝群像』とした書物は、塚田氏のいう『後期皇帝伝』と同じものであり、普通 *Historia Augusta* といわれる伝記集だからである⁶。「漱石の種本」は「恐らくスミスの『古代学人名辞典』もしくはボーンズ叢書に収められたブリニウス『博物誌』の訳注によつたものであらう」という言葉をみたとき、私はこれで「孔雀の舌」の出典は間違いなく解決した、と思った。ところが、その後『シーザーの晩餐』に載せられた「参照引用文献」に目を通しているうちに、いくつかの疑問が出てきたのである。

まず、塚田氏のいう「スミスの『古代学人名辞典』とは、正確には何を意味するのか。この「スミス」は、『猫』の本文中、「この間よりギボン、モンセン、スミス等諸家の著述を渉猟致し居り候へども」とある所で言及される人物で、『漱石全集』第一巻（一九九三）「注解」は、「イギリスの古典学者、聖書学者、辞書編纂者。『ギリシア・ローマ故事辞典』（一八四二）『ギリシア・ローマ伝記辞典』（一八四九）など多数の辞典を編纂した。漱石の蔵書中にはスミスの編纂した『古代ギリシア・ローマ伝記神話地理辞典』がある」としている⁷。スミスはたしかに「多数の辞典を編纂した」のだが、スミス編の辞典類があまりに「多数」なので、塚田氏のいう『古代学人名辞典』とはその中の

どれを指すのか、理解しにくかったのである。

『シーザーの晩餐』は驚嘆すべき博識に支えられた興味深い書物であるが、いわゆる学術書とは一風違った体裁をとっているのです。そこに述べられた内容を確認するのにかなり手間取ることがある。『古代学人名辞典』との関連では、先に触れた「参照引用文献」は「一般参考書」中「辞典」の項でスミスの *Dictionary of Greek and Roman Antiquities* (1856) と *Dictionary of Greek and Roman Geography* (1854) とを挙げており、また「各章参照引用文献」では、「第一章ローマの繁栄と市民生活」の項でこれらの二冊のうち前者のみを挙げているが、いずれも『古代学人名辞典』という訳語にはふさわしくない。また、漱石の蔵書にはこのどちらも残されておらず、スミスの辞典類で漱石文庫に残されているのは、*A Classical Dictionary of Greek and Roman Biography, Mythology, and Geography* (1899) だけである。

念のため *Dictionary of Greek and Roman Antiquities* (1845) で調べてみると、「PAVO」すなわち「孔雀」の項に “In the feasts of Emperors Vitellius and Helogabalus, enormous dishes were frequently served up, composed of ragouts of the tongues and brains of peacocks.” (イタリックは塚本) という記述がある。引用文中ラグー (ragouts) とは、要するに香辛料を効かせた煮ぶ、もし漱石がこの辞典に目を通していたら、たしかにこれを「種本」にした可能性は充分あると言えよう。

次に塚田氏が指摘した「ボーンズ叢書に収められたプリニウス『博物誌』の訳注」とは、正確には *The Natural History of Pliny* (Bohn's Classical Library) である。この本の Book XXIX, Chap. 38. “Remedies for Diseases of the Eyes”には、次のような箇所がある。

Hen's dung, too, but only the white part of it, is kept with old oil in boxes made of horn, for the cure of white specks upon the pupil of the eye. While mentioning this subject, it is worthy of remark, that peacocks swallow

their dung, it is said, as though they envied man the various uses of it” (イタリックは塚本)。

ここでプリニウスは、ある種の処理をしたメンドリの糞が瞳孔に現われた白斑の治療に用いられるとした後、クジャクは自分の糞が人間に利用されるのを嫌うかのように、糞を嚥下してしまう、と述べる。この「クジャク」には訳者の脚注が付けられており、“The tongues of peacocks and larks are recommended for epilepsy, by Lampriidus, in his *Life of the Emperor Elagabalus*. The statement is, of course, a fiction” (ランプリディウスの「エラガバルス皇帝伝」では、クジャクとヒバリとの舌は癲癇に効くとされている。この言葉は、無論作り話である)。とされているのである。もし漱石がこの部分を読んでいたら、これを「種本」にした可能性もまた否定できない。

だが問題は、このいずれれもが漱石文庫には残されておらず、しかも、現存する資料によるかぎり、漱石が目を通した痕跡も見いだせないことである。さらにこれら二冊は、いずれもローマ人の「入浴嘔吐の術」に触れておらず、また、クジャクの舌は一種の医学的あるいは呪術的意味をもつものとしていたのであって、「羅馬全盛の砌り、一時非常に流行」した料理だと述べているわけではない。

では、漱石文庫に残されている *A Classical Dictionary of Greek and Roman Biography, Mythology, and Geography* はどうであろうか。この辞典が『猫』における奇妙な知識のいくつかを提供していることは疑いない。例えば、『猫』(八)には、「希臘」の「イスキラスと云ふ作家」が「学者作家に共通なる頭」すなわち「禿」頭をもっていったという話が紹介されている。「彼はつる／＼然たる金柑頭を有して居つた」が、この男がある日「例の頭(中略)を振り立て／＼、太陽に照らしつけて往来をあるいて居た。」その時、「イスキラス」に次のような椿事が起つた。

此時イスキラスの頭の上に一羽の鷺が舞つて居たが、見るとどこかで生捕つた一匹の亀を爪の先に攫んだ儘である。亀、スツポン杯は美味に相違ないが、(中略)いくら美味でも甲羅つきではどうすることも出来ん。(中略)さすが



Aeschylus. (From a gem.)

図版 1

の鷲も少々持て余した折柄、遙かの下界にびかと光つた者がある。その時鷲はしめたと思つた。あの光つたものゝ上へ亀の子を落したなら、甲羅は正しく砕けるに極はまつた。砕けたあとから舞ひ下りて中味を頂戴すれば訳はない。さうだ／＼と覗を定めて、かの亀の子を高い所から挨拶もなく頭の上へ落した。生憎作家の頭の方が亀の甲より軟らかであつたものだから、禿はめちや／＼に砕けて有名なるイスキラスはこゝに無残の最後を遂げた。

前記『漱石全集』「注解」は、「この逸話は、漱石の蔵書中にある『古代ギリシア・ローマ伝記神話地理辞典』のアイスキュロスの項に一説として簡単に紹介されている」とする。だが看過することができないのは、「アイスキュロスの項」に鷲がアイスキュロスの頭を目掛けて亀を落そうとしているイラストが載せられていることである（図版1参照）。漱石はこの図版をいわば敷衍して、上述の挿話を『猫』に載せたのである。

ところが「孔雀の舌」に関するかぎり、この『古代ギリシア・ローマ伝記神話地理辞典』は何も語っていないのだ。そもそも塚田氏が挙げた *Dictionary of Greek and Roman Antiquities* が事項主義をとっているのに対し、*A*

Classical Dictionary of Greek and Roman Biography, Mythology, and Geography は人名主義をとっているのである。したがって

“PAVO”といった項目そのものが見当たらないのだ。

では「ヘリオガバルス」についてはどう述べているのか。この辞典で“*Hellogabalus*”の項を見ると“[*Elagabalus*]”とあるに過ぎない。「エラガバルス」の項を見よ、という意味である。両者はもともと同一の人物だからである¹²。そこで「エラガバルス」を見ると、彼の生涯が淡々と書かれているが、クジャクの舌を食べたといった記述は一切ない¹³。漱石の蔵書には、その他にもエラガバルスを載せた参考書

が含まれているが¹⁴、これらにもクジャクの舌に関連する記述はまったく載せられていないのだ。

このように見えてくると、「スミスの『古代学人名辞典』もしくはボーンズ叢書に収められたプリニウス『博物誌』の訳注」のいずれかが「漱石の種本」ではないかとする塚田説には、やはり疑問が生まれるのである。かくして「孔雀の舌」の出典についての疑問は、振り出しに戻ってしまう。そこで、この問題は一応棚上げにして、第二の問題に移ることにしたい。

（三）「孔雀の料理史」

「降つて十六七世紀の頃迄は全欧を通じて孔雀は宴席に欠くべからざる好味と相成」った云々というくだりを見て、苦沙弥先生は「孔雀の料理史をかく位なら、そんなに多忙でもなさうだ」と愚痴をこぼす。「料理史」は、さらに「レスター伯がエリザベス女皇をケニルウォースに招待致し候節も慥か孔雀を使用致し候様記憶致候」と続くが、このあたりの記述にはどれほどの妥当性があるのだろうか。

クジャクがローマ時代から貴重な食材とされていたことは、事実である。プリニウスによれば、初めてクジャクを食卓に供したのは雄弁家ホルテンシウス（前一一四—四五）で、それは彼が祭司に任じられた際の祝宴においてだったという¹⁵。また中川芳太郎は、「Peacock (*Pavo muticus*) は南部亜細亜の産であるが、既に古羅馬時代に歐洲に移入せられ、食卓の佳肴として定評があつた」と述べる¹⁶。そうだとすれば、「十六七世紀の頃迄は全欧を通じて孔雀は宴席に欠くべからざる好味」となったというあたりは、一般論として常識的な線ということになるう。

では、「レスター伯がエリザベス女皇をケニルウォースに招待致し候節」云々はどうか。「ケニルウォース」との関係で、『漱石全集』第一巻「注解」は言う。「(略) レスター伯は一五七五年にエリザベス女王をここに招き、豪華な宴をはって歓待した。その様は漱石蔵書にもあるウォルター・スコットの小説『ケニルワース』(一八二二)に詳

しく描かれている」と。確かにそういう言い方もできるのであるが、ただ、スコットの『ケニルワース』には、孔雀料理そのものに関する記述は見当たらない。そもそもスコットは、波乱万丈の筋立て、つまりプロットの面白さで読者をひきつける作家で、宴会の献立といった細部にこだわる作家ではない。スコット自身が、『ケニルワース』第三十一章で、“It is by no means our purpose to describe minutely all the princely festivities of Kenilworth...” (ケニルワース城の贅を尽した祝賀行事の様子をすべて克明に描くのは作者の目的ではない…)と述べているのである¹⁷。すると、ケニルワース城での大宴会をクジャクと結びつけたのは、スコットではなく漱石自身だということになる。この時「孔雀を使用」したという漱石の推定が妥当であることは、言うまでもない。クジャクが「既に（中略）食卓の佳肴として定評があつた」以上、「レスター伯がエリザベス女皇をケニルウォースに招待」した際の贅をつくした饗宴で「孔雀を使用致」さなかったはずがないのである。

クジャクが貴重な食材として「定評」があつたとすると、漱石と孔雀料理との接点の一つに絞りこむのは無理かもしれない。だが、クジャクが「食卓の佳肴」だということを初めて漱石に教えた作品については、手掛かりがないわけでもないのだ。私見によれば、それはテニソンの *Gareth and Lynette* (1872) に違いないのである。

ここで、この作品の梗概を記しておこう。主人公ギャレスはオークニーの王ロトと妃ベリセントとの子で、アーサー王の宮廷で一年の間厨房の使用人として働くことを母に許される。彼は身分を隠して王の執事ケイの下で働くことになるが、その時たまたまりネットという女性が宮廷に出頭し、実の姉妹ライオノーズが四人の騎士に監禁されているので、宮廷随一の騎士ランスロットを遣わして彼女を救い出していただきたい、と王に願う。ギャレスは自分がその役目を引き受けたいと申し出て王の許可を得るが、リネットは彼が賤しい下男にすぎないと思いこみ、激しい嫌悪を覚える。ライオノーズ救出に向かう途次、彼女は絶えずギャレスを口汚く罵るが、彼が次々に悪逆無道な騎士たちを倒すのを見て次第に彼を信頼するようになる。最も武勇に勝れていると思われた第四番目の騎士との対決を前にしたとき、彼の安全を願うあまり、彼女はこの役目をランスロットに替わってほしいとさえ思うにいたる。他方、ギャレ

スは最後まで自らの義務を果たしたいと言うが、実はこのとき事実上決着がついていたのである。というのは、第四の騎士は、見るからに恐ろしい鎧を身に着けていたとはいえ、実は少年にすぎなかったからである。かくしてこの作品は“*And he that told the tale in older times / Says that Sir Gareth wedded Lyonors, / But he, that told it later, says Lynette.*”という言葉で終る。ギヤレスが自ら救出したライオノーズと結婚したか、それとも彼女の救出をアーサー王に願い出たリネットと結婚したのかは分からない、という書きかたである。この物語詩の素材は基本的にはマロリーの『アーサーの死 (*Le Morte D'Arthur*)』第七巻から得たが、テニソン自身も多くのものを付け加えたとされている。なおこの作品は後に『国王物語詩集 (*Idylls of the King*)』に収録された。

漱石は、この詩を先ずマックミラン版の作品集の一冊“*Gareth and Lynette. With Introduction and Notes by G.C. Macaulay (1893)*”で読んだと思われる。ところがこの作品で、漱石は“*And there they placed a peacock in his pride / Before the damsel.*” (イタリックは塚本。八二九—三〇行) という言葉に遭遇したのである。この前後の文脈は、おおよそ以下のようなものである。

ギヤレスとリネットとがアーサー王の宮廷を出てライオノーズ救出の旅に向かい、深い森の中で道に迷いかけた時、ギヤレスは盗賊に殺されそうになったその地の領主 (Baron) の命を救った。二人はその返礼として、領主の館に招かれるが、その日は盛大な宴会が催されたので多くのご馳走が残されており、帰宅した領主を含めて三人は多くの高価な珍味に迎えられた。このとき、リネットの「前には尾を広げたままのクジャクが置かれ、領主はリネットの隣にギヤレスを坐らせた (*And there they placed a peacock in his pride / Before the damsel, and the Baron set / Gareth beside her.*)」のである。

クジャクが食卓にのぼったというのは、漱石にとって新しい発見だったに違いない。漱石文庫に残されている前記『ギヤレスとリネット』では、“*placed a peacock in his pride*”という部分に下線が引かれているのである。さらにこの数行後、つまり八四九行にも“*the peacock in his pride*”という表現が繰り返され、ここにも下線が引かれてい

る¹⁸。それだけではなく、この頁の下の余白には漱石自身の書き込みが残されているのだ。この書き込みはやや不鮮明であるが、“to place a peacock in his pride”と読める。つまり、“placed a peacock in his pride”という過去形を“to place a peacock in his pride”という不定詞（つまり一般的な表現）に書き換えているのである。漱石はおそらく、八二九行の表現を言わば反芻していたのであろう。「尾羽を広げたままの孔雀を〔食卓に〕置く」という表現が、当時の漱石にとつては驚きだったに違いないのである。

この版ではまた、八二九行の“in his pride”の部分に、“829. in his pride, i.e. decked with his gay plumage, as was the custom in serving such birds at banquets.”という注がついている。この注は“in his pride”を「華やかな長い羽毛で飾り立てられたそのままの姿で」と言い換えているが、この部分は必ずしも必要ではないかもしれない。“pride”には「クジャクなどの翼を下げて」十分に広げた尾」という語義があるからである¹⁹。ここで看過し得ないのはこれに続く部分、すなわち「この種の鳥を宴席に供する場合、このような姿で出すのが仕来たりだった」という部分である。これが「仕来たり」だということは、クジャクをこのような姿で食卓に出すのはアーサー王伝説に類するロマンスの中ばかりでなく、王侯貴族の実生活の中でもしばしば行われたのだということになるからである。

そうだとすれば、「レスター伯がエリザベス女皇をケニルウォースに招待」した時にも、クジャクが同じような姿で食卓にのぼったはずである。すなわち、このとき「孔雀を使用致し」という言葉の背後には、クジャクが尾を広げたままテーブルに置かれているイメージが潜んでいるのである。換言すれば「レスター伯」云々の背後には、テニソンが隠れているに違いないのだ。

「ケニルウォース」城云々の後に、「有名なレンブラントが画き候饗宴の図にも孔雀が尾を広げたる儘卓上に横はり居り候」と続く。『漱石全集』はこの部分にも図版入りの注をつけ、「皿にのせられた孔雀が美食を示すものとして卓上に描かれている」としている（図版2参照）²⁰。かつては王侯貴族の食卓を飾ったクジャクも、十七世紀にもなり同じような姿で豊かな市民の食卓に載せられるようになったのである。この図版にはたしかにクジャクの頭部が画



図版 2

かれているが、これは「尾を広げたる儘」横たわっているのだろうか。

漱石がこの「饗宴の図」に接した経緯は分からない。だが、現在ドレンデン美術館に所蔵されているこの作品を漱石が直接眼にした可能性は低く、おそらく漱石の知識は美術書等に載せられた図版によっているであろう。そうだとすれば、不注意な鑑賞者だったクジャクが「尾を広げ」ているとは必ずしも認識しないのではなからうか。だが、クジャクはたしかに尾を広げている。レンブラント自身とされている人物の帽子と、彼が高く上げたグラスとに囲まれた空間に、中心が濃く画かれた複数の丸い模様が微かに浮び上っているのだ（図版3参照）。これは、クジャクが一杯に広げた尾羽に現われる紋様（eye）に違いあるまい。この紋様に気づいた漱石は、やはり注意深い観察者だったのだろう。

だが同時に、漱石はマックミラン版 *Gareth and Lynette* の注釈によつて、「この種の鳥を宴席に供する場合、このような姿で出すのが仕来りだった」ことを知っていたのである。皿の上のクジャクにナイフが添えられていることから、このクジャクが食用であることは直ちに分かる。これを見た漱石は、クジャクは「尾を広げ」ているはずだと考えたはずである。このように理解した上で画面を見れば、ここに広げた尾羽を見出すのは比較的容易だったに違いない。つまり漱石は、この画面を“a peacock in his pride”の延長線上において理解したのだ。多少言い方を換えれば、テニソンの詠った“a peacock in his pride”のイメージをレンブラントが漱石に初めて提供したとも言えよう。いずれにせよ、「レンブラントが画き候饗宴の図」の背後にも、テニソンが潜んでいるのは確実である。

とすると、苦沙弥先生の言う「孔雀の料理史」は、漱石がマックミラン版 *Gareth and Lynette* を読まなかったら、成立し得なかったのである。すなわち、この物語詩の作者テニソンは、「料理史」で言及されるスコットやレンブラントよりも実ははるかに重要な役割を担っているのだ。

Web版では非表示

図版 3

(四)「羅馬人」の「秘法」と「孔雀の舌」と

ここで迷亭の言う「羅馬人」の「秘法」に移りたい。すなわち、ローマ人は満腹するまで食べたものを「一種の方法」によって「悉く嘔吐」し、その後再び「飽く迄珍味を風向好した」というあたりの材源は何か、という問題である。これに類する話もまたかなり広く知られており、例えばスエトニウス（六九―一六〇）の『ローマ皇帝傳』は、クラウディウス、ネロ、ウィテリウス等について、それぞれ次のように述べている。

クラウディウスは、食物や酒をいつでもどこでもしきりと欲しがった。（中略）彼は酩酊しない限り、なかなか食堂から退出しなかった。この後すぐ寢台に仰向けになり、口をあけ喉の奥に羽毛をつっこみ、胃の負担を軽くしてもらっていた。²¹⁾

ネロは（中略）音楽の素養も身につけていたので、統治権を手に入れるとさっそく、その当時拔群の名声を馳せていた豎琴奏者テルプヌスを招き、夕食後何日も続けて、夜ふけまでうたわせ、その側に坐っていて次第に自分も思い立って練習を始めた、そしてこの種の芸人が声を美しく保ち、声量をあげるために、ふだん実行していることを自分も一切省かなかった。たとえば仰向けになって、鉛板を胸の上で支えたり、浣腸や嘔吐によって胃腸を浄化し、発声に有害な果物や食物を断っていた。²²⁾

ウィテリウスは、とりわけ榮耀榮華と残忍非道に溺れ、食事は常に三度、ときには四度にもわたって、朝食と昼食と夕食と夜ふけの酒盛りを摂り、いつも嘔吐によって、どの食事でも難なくこなしていた。²³⁾

かかる愚かしい贅沢に苦々しい思いを禁じ得なかった哲人の一人に、セネカがいる。彼は若かりし日のネロの師だったが、後にネロに疎んじられ、遂には死を命じられた。セネカは、ローマ人が世界の隅々から途方もない食べ物を集めてそれを貪り食うのを軽蔑して、「彼らは喰うために吐き、吐くために食う(vomunt ut edant, edunt ut vomant)」と述べた。これは、もともと彼が母ヘルヴィアに送った書簡の中にある言葉だが、その簡潔な表現とも相俟って各種の文献で引用されることが少なくない。

ただ、漱石がこの種の文献を直接読んだと推測し得る手掛かりは、現在のところ見つけることができない。漱石がこういうローマ人の風習を知る契機になったと言えるのは、漱石文庫に残されている資料を参照する限りでは、シエンケヴィッチ(一八四六—一九一六)の『クオ・ヴァデイス』(一八九六)だけではなからうか。漱石が通読したこの歴史小説には、*A TALE OF THE TIME OF NERO* という副題が付けられている。漱石は、この作品を通して「ネロの時代」についてのある程度の知識を得たのではないか。

『クオ・ヴァデイス』は、『文学論』第二編第三章「fに伴ふ幻惑」(二)「読者の作品に対する場合」(2)「善悪の抽出」において言及されている。ここで漱石は、「普通文学を賞美する」場合、「直接経験の場合と間接経験の際と其間に感情の量的差異」と「性質上」の「差異」があることを指摘し、それは「読者が文学賞翫に際し」てある種の「除去法」を実行するからだ、とする。その「除去法」の第二が「善悪の抽出」である。この言葉はやや分かりにくいだが、大学の講義では漱石はおそらく「moral element / elimination」という表現を用いたのであろう。²⁵ 文学作品を鑑賞する場合、読者は実生活における道徳観念を一時「除去」(eliminate)することができる、ということである。ところが「徳義心は人に因つて其強弱の度を異にするが故に其抽出も亦人によりて幾分の差異あるを免れ」ない。「かの Nero は到底尋常一様の心理を以て論ずべからざる程極端に馳せたるの好例」で、「斯様の大美術家に至りては誠に論外の例とするの外なし」ということになる。ネロは「常に Priam を羨」んでいたが、その理由は彼が「Troy 落城の折、壮麗なる宮殿の跡も残さず鳥有に帰したる偉観に逢ひ得たりと云ふに過ぎず、かくの如くして彼は遂に其都

羅馬を一炬に付して宿願を現実にせり」と伝えられているからである。漱石はこう述べた後、ルナンは『アンティクライスト』で「これを否定しこれを誇大の伝説に過ぎず」としたが、「尚小説 *Quo Vadis* を参照せよ」と付け加えているのだ。とすると『クオ・ヴァディス』は、暴君ネロのイメーヂを漱石に提供した源泉の少なくとも一つだということになる。事実この作品では、第二部第十三章以降、漱石が一言で要約したネロの蛮行が繰り返し語られているのである²⁶。

この作品の時代的背景は、紀元一世紀、ローマ皇帝ネロの下でキリスト教徒が激しい迫害を受けながら着々と信者を獲得していったころである。シェンケヴィッチが、ネロに迫害されるキリスト教徒をロマノフ王朝下で弾圧されている祖国ポーランドの民衆と重ね合わせたこともあって、この作品は大きな反響を呼び、一九〇五年にノーベル文学賞を受賞、世界的ベストセラーになった。ただし、漱石の蔵書に残されている英訳は一九〇一年版である。ここには、「嚥下せるものを悉く嘔吐」するためのローマ人の「秘法」というアイデアを漱石に示唆したのではないかと思われる場面が、冒頭近く（第一部第二章）に見られる。

“When you read it pay attention to the description of the feast of Trimalchion. As for verses, they disgust me since Nero began to write them. When Vitellius wants to ease his stomach he uses little ivory sticks which he thrusts down his throat; others for the same purpose use flamingo feathers steeped either in oil or in a decoction of some sort of grass possessing the same properties...” (イタリックは塚本)²⁷

この前後関係を、簡単に述べてみよう。作品の主人公ヴィニシウス (Marcus Vinitius) は海外勤務からローマに帰ったばかりの高級軍人だが、ある日親しい叔父ペトロニウス (Petronius) を訪れ、自分は先日オーラス・プローシアス (Aulus Plautius) の家で美しい女性を見て、たちまち激しい恋愛感情に捉えられてしまった、と告白する。甥の訴

えを聞いた。ペトロニウスが彼を連れてブローシアスの邸宅に向かう途中、ある書肆に立ち寄り、自分が書いた「彩色手写本 (illuminated manuscript)」を求めてヴィニシウスに与える。引用文はこのときペトロニウスがヴィニシウスに語る言葉である。彼は、『サテュリコン (*The Satiricon*)』の中の「トリマルキオンの饗宴」をよく読んでくれたと言った後、皇帝ネロに話題を移す。ネロは、ホメロスを超える大詩人だという名声を得たいという執念に取り憑かれており、特に、「趣味の審判者」として名声が高いペトロニウスに自分の力量を認めてもらいたい、と望んでいる。ところがペトロニウスは、ネロが詩を書き始めて以来あいつの詩は吐き気を催させる、と痛烈な言葉を口にするのである。ペトロニウスは続ける。ヴィテリウス (*Vitellius*) の奴は、苦しいほど食べ物を詰め込んだ胃袋を楽にさせるために、象牙の細い棒 (*stick*) を咽喉の奥へ突っ込む。同じ目的でオリヴ油に浸したフラミンゴの羽毛を使う奴もおり、オリヴ油に類する性質の植物を煎じたエキスを浸したフラミンゴの羽毛を使う奴もいるが、自分はネロの作品を考えるだけで吐き気を催すのだ、と。これは詩人としてのネロにも触れているが、こういう言葉が反権威主義者だった漱石の注目を惹かなかったはずがあるまい。これが、迷亭の言う「羅馬人」の「秘法」の源泉、少なくとも源泉の一つであることは、明らかだろう。

この場面は、第二部第十八章で再び言及される。このとき、ペトロニウスはヴィニシウスに向かって、「ブロンズ色の髯の男 (*Bronzebeard*)」すなわちネロが詩と音楽とを深く愛していることを認め、先に自分が言った言葉を一部修正する。

“Not worse than many others. Lucan had more talent in his little finger. Yet Bronzebeard is not entirely lacking. He has, first, a great love for poetry and music....As to the verse, it is not true, as I once said, that I use them after feasting for the same purpose to which Vitellius devotes flamingo feathers. They are sometimes eloquent...”²⁸ (イタリックは塚本)

すなわちペトロニウスは、ネロの詩が他の多くの詩よりも下手なわけではないとし、ルーカン [Marcus Annaeus Lucanus : 三九―六五] の方がネロにわずかに優るとはいえ、ネロもまったく才能がないわけではない、と言う。続けて、ペトロニウスは述べる。自分は、ヴィテリウスがフラミンゴの羽毛を使うのと同じ目的でネロの詩を宴会の後に使うと言ったが、それは本当ではない、と。ペトロニウスの言葉にある “as I once said” とは、言うまでもなく第一部第二章の一部、すなわちこの直前に引用した部分を指している。ただこの場面では、「苦しいほど食べ物を詰め込んだ胃袋を楽にさせるため」にヴィテリウスが用いるのは「フラミンゴの羽毛」ではなくて「象牙の細い棒」である。これは原作者の一寸した思い違いであろうが、ペトロニウスが「自分はネロの作品を考えるだけで吐き気を催す」と言ったのは事実である。ここで読者は、先に述べられた「羅馬人」の「嘔吐方」を想起させられるはずである。

かくして古代ローマでは、フラミンゴの羽毛あるいはそれに類するものが「嘔下せるものを悉く嘔吐」するために用いられたことが分かる。ところがフラミンゴは、その羽毛が嘔吐のために用いられたばかりではなく、その舌も珍味として食用に供せられたのだ。それが分かるのは、第一部第七章でネロが豪勢な宴会を催す場面においてである。ここでは献立そのものは詳しくは描かれていないが、この大宴会では、ローマ滅亡の予感と強力な軍勢力への信頼との間で動揺しているドミティウス (Domitius) という老人が、泥酔して次のような醜態を演じる。

At last he rolled under the table and was soon engaged in *heaving up flamingo tongues, roast mushrooms, locusts in honey, fish, meat, and everything that he had eaten or drunk* ⁸⁵ (イタリックは塚本) .

ドミティウスがテーブルの下に転がって、「食べたり飲んだりしたものをすべて吐き出」した場面である。これはかなり生々しい「胃内廓清」の場面であるが、中でも効果的なのは「フラミンゴの舌」ではあるまいか。ドミティウスが吐くのが、まず「フラミンゴの舌」である。現代では用いられなくなったこの奇妙な食材は、それだけで読者を驚

かせるはずである。また、それが“flamingo tongues”と複数形になっている以上、「フラミンゴの舌」はかなり多量であるばかりか、ある程度まで原形を識別できるに違いない。以下、「焼いたマッシュルーム」、「蜂蜜に漬けたイナゴ」、と次々に実例をあげた後、「魚」、「肉」と次第に具体性を薄め、最後に「食べたり飲んだりしたものすべて」といった一般的な描写で終わる。このような描写で読者の印象に強く残るのは、冒頭で提示された最も具体的なイメージである。つまり、さまざまな食材と胃液とにまみれながら、ある程度原形をとどめている複数の「フラミンゴの舌」である。漱石の脳裏にもまた、このような「フラミンゴの舌」が彷彿と浮かんだに違いないのだ。ここまでは、ほぼ確実だと言つてよからう。

ここで一步を進めてみよう。この「フラミンゴ」を漱石が「孔雀」に置き換えた可能性は考えられないだろうか。フラミンゴの舌も貴重な食材だと漱石が初めて知ったときの驚きは、クジャクが「食卓の佳肴」として珍重されていたという発見の驚きと通底するところがある。とすると、漱石が「孔雀の舌を御風味に入れ可申候」と書いたとき、彼の意識には「フラミンゴの舌」と並んでテニソンの“a peacock in his pride”のイメージが浮かんでいたのではなからうか。そうだとすれば、古代ローマで実際に賞味された「フラミンゴの舌」を「孔雀の舌」に置き換えるといったことは、漱石の想像力にとってきわめて容易だったのではなからうか。

この可能性めぐって、いくつかの事実を指摘しておこう。既に述べたように、エラガバルスが「孔雀の舌」を食べたのは「疫病から免れる」ためで、この食材そのものを賞味するためではない。ところが「フラミンゴの舌」が「羅馬全盛の砌り、一時非常に流行致し候もの」であり、「豪奢風流の極度」であることは、これがネロ主催の宴会で食卓に供せられたことから容易に推測することができる。つまり、「孔雀の舌」を「フラミンゴの舌」と置き換えたと考えれば、漱石のタネは文献的にも無理なく推定できるのである。

また『クオ・ヴァデイス』には、フラミンゴとクジャクとが並列されている場面がある。第二部第五章では、ヴィシニウスは恋人リジア (Lygia) に贈物を持参したユダヤ人ナザリウスに強い嫉妬心を抱くが、リジアの言葉を聞いて

て反省し、「自分が田舎の家に戻ったら、庭にたくさんいるクジャクかフラミンゴかを雄雌一羽ずつ (a pair of peacocks, or of flamingoes)」この男にやろうと約束する³⁰。これは、クジャクとフラミンゴとがほぼ同じ価値をもっていたと思わせる記述である。第三部第六章では、ローマの大火の後焼け出された貧民が皇帝や貴族たちの庭園に仮住まいをし、そこに飼われていたクジャクやフラミンゴや白鳥や駝鳥(中略)は彼らに食べられてしまった (Peacocks, flamingoes, swans, and ostriches fell under the knives of the mob.³¹)とされる。ここでは、クジャク、フラミンゴ、白鳥、駝鳥は同じような食材として並列されている。つまり、『クオ・ヴァディス』を読むと、フラミンゴからクジャクが連想しても不自然ではないと思われるのだ。

さらにこの作品では、「舌」のイメージが一種不快な沈殿物のように読者の記憶に残る。というのは、キリスト教徒を迫害する手段として、ネロはキリスト教徒の「舌」を切り取る、という残酷な形罰を考え出すからである。最初の犠牲者はキロ・キロデニスというギリシヤ人である。彼は初めヴィニシウスに雇われてキリスト教徒の集団に潜入して各種の情報を集める。その後キロは、彼らが恐るべき悪行を重ねているばかりかローマに火を放ったという偽りの証言をし、その見返りとして、宮廷でそれなりの地位を与えられる。ところが彼は、自分の証言のために無実のキリスト教徒が言語に絶する迫害を受けるにいたったのを見て良心の呵責に耐えられなくなり、ローマへの放火を指示したのは皇帝ネロだと叫んで、ネロを弾劾する。キロはその罰として舌を切り取られ、以後、この刑罰がキリスト教徒一般にも適用されるようになるのである。キロが舌を切り取られた直後の有様は、「After the tortures which Tigellinus had inflicted, not a drop of blood remained in his face, and only on his beard was to be seen a red spot caused by the blood after his tongue had been torn out.³² (イタリックは塚本。「大意」ティゲリヌスが「キロに」加えた拷問の後ではキロの顔にはまったく血の気がなく、彼の顎鬚の中には舌が切り取られた後の赤い血痕が見えるだけだった)」と描写されている。引用文中「ティゲリヌス」はネロの佞臣だが、この部分はあまりにおどましくグロテスクなので容易には忘れることができないだろう。漱石もまたこれに近い印象をもったとすれば、「舌」そのものに

関する不快な記憶が残らなかったはずがあるまい。

付言すれば、『猫』発表当時は「フラミンゴ」を知らない読者は少なくなかったと思われる。『言海』（明治三七）も『辞林』縮刷版（大正七）も、フラミンゴという見出し語を載せていないのである。平凡社の『大辞典』（昭和一〇）は「フラミンゴ」を載せているが、語義では「紅鶴」を見よとする。だが、この「紅鶴」もまた、前記『言海』や『辞林』には見出せない。一般に辞書に採録される言葉は常に実生活で使われる時期よりも遅れるとはいえ、『猫』（二）が発表された明治三十八年には、「フラミンゴ」も「紅鶴」もおそらく一般の知識には含まれていなかったであろう。漱石が「フラミンゴ」の代わりに「孔雀」を使つたとすれば、その背景にはこのような事情が潜んでいたのかもしれない。

（五）「孔雀の舌」と漱石の想像力

最後に、「孔雀の舌」ないし「孔雀の料理史」の扱い方、換言すれば漱石における想像力の一面について触れておきたい。その一は、この材料が「アンドレア、デル、サルト」の場合と同じく、『文学論』にいう「不対法」の手法で処理されていることである。前者では、ブラウニングの原作とはまったく無関係に、「以太利の大家アンドレア、デル、サルト」を一方に置き、「遠近無差別黑白平等の水彩画」を描きながら「アンドレア、デル、サルトを極め込んで」いる苦沙弥先生を他方に置いて、両者の「不調和」な対照から笑いを触発する。食材としての「孔雀」の場合には、テニソンの作品にまったく触れることなく、古代ローマ以来の豪華な食事に供された「孔雀」を一方に置き、他方に「大飯を食った後でタカヂヤスターゼを飲む」以外には能のない「胃弱」の苦沙弥先生を置いて、両者の「不調和」な対照から滑稽感を生み出している。かくして不調和な対比から笑いを生み出す方法を『文学論』は「不対法」と名づけるのである³³。

『文学論』は、「吾人は此種の不对法を個人の上に認むる時、滑稽的快感を禁じ得ざるを以て、此滑稽的快感を自然の供給以上に食らんとするの念よりして人工的に此不对法を製造して快を取る」とあるとする。迷亭の「年始状」は、まさしくその一例である。「此人工的不对法は二種の形式によりて実世界に出現」するが、「其一は悪戯にして、他は虚言」である。『猫』の世界は「実世界」ではないが、迷亭の「年始状」はいくぶんか「虚言」を含んだ「悪戯」に他ならない。一杯くわされたと知った苦沙弥先生は、「新年忽々こんな悪戯をやる迷亭は余つぽどひま人だなあ」と「笑ひながら」言ったのだ。

その二は、『猫』と『濛虚集』との関係についてである。『猫』が「ホトトギス」に載ったのは明治三十八年一月から三十九年八月までだが、これと平行して、後に『濛虚集』としてまとめられた短編も「ホトトギス」その他の雑誌に相次いで発表されている。ところが、『猫』の世界と『濛虚集』のそれとは、一見したところ、同一の作家が同一の時期に書いたとは到底思われないほどに異質であるように見えるのである。

小宮豊隆は『猫』の「系列」と『倫敦塔』以下の、「美しい短篇の系列」、すなわち『濛虚集』の世界とを対照させた。それは、「現実を軽蔑し現実を憎むが故に、現実の顔を歪めて見せ、その歪んだところを笑つて楽しむやうな態度」と、「到底現実には見ることでできない、さまざまに美しい夢の世界を創造し、それを鏤心彫骨して描き上げ、ここに美しいものがあると、世間に向かつて高高と掲揚する」姿勢との対照である³⁴。江藤淳は、小宮の漱石像が「作家漱石の非常に精巧な剥製」だという中村光夫の言葉を引用して小宮を批判したが、³⁵「吾輩は猫である」と、『濛虚集』の諸短編の間にはある種の対立関係があるとする点では小宮に近い³⁶。その他にも、『猫』と『濛虚集』との懸隔ないし異質性に注目する論考にはこと欠かず、漱石自身もまた同様な趣旨の発言をしている。「ある人云ふ漱石は幻影の盾や薙露行になると余程苦心をするさうだが猫は自由自在に出来るさうだ（中略）。詩を作る方が手紙をかくより手間のかゝるのは無論ぢやありませんか。（中略）薙露行杯の一頁は猫の五頁位と同じ労力がかゝるのは当然です（明治三十八年十二月三日付高浜虚子宛書簡）」という言葉が、その一例である。

しかし、同一の作者がほぼ同じ時期に執筆した作品相互の間に、まったく通底するところがないはずがあるまい。そうだとすれば、両者をつなぐ目に見えないチャンネルの一つが、テニソンだったのではないか。「孔雀の舌」ないし「孔雀の料理史」がテニソンの *Gareth and Lynette* なくして成立し得なかったことは、既述の通りである。他方、『濛虚集』中の白眉とも言うべき「幻影の盾」や「薙露行」もまた、テニソンの *Lancelot and Elaine* あるいは *Guinevere* なしには成立し得なかったことは言うまでもない³⁷。つまり漱石は、一方で *Gareth and Lynette* をタネにして読者を笑わせながら、他方では *Lancelot and Elaine* や *Guinevere* を換骨奪胎し、「苦心」を重ね「手間」をかけて「詩を作る」という作業に専心していたのである。これらテニソンの作品がそれぞれ、後に *Idylls of the King* の一編として収録されたことについては、贅言を要しないだろう。テニソンを通して『猫』が「幻影の盾」や「薙露行」と一部通底しているというのは、このような意味においてである。

漱石が「薙露行や天似孫の詩見厭たり」の一句を詠んだのは、明治三十六年である。漱石が「見厭た」と言いきったテニソンの詩は、その後も漱石の中でしずかに醗酵し続け、彼が作家として出発するにあたっては、それぞれに異なった文脈において漱石の想像力を強く刺激したのである。

1 スエトニウス著国原吉之助訳『ローマ皇帝伝』（下）岩波文庫（一九八六）二五五頁。

2 ペトロニウス著国原吉之助訳『サテュリコン』岩波文庫（一九九二）五四頁。

3 アエリウス・スバルティアヌス他著桑山由文・井上文則・南川高志訳『ローマ皇帝群像2』京都大学学術出版会（二〇〇六）、三一八頁。なお、アントニヌス・ヘリオガバルスの在位は、二一八―二二二年。

4 久泉伸世氏のご教示による。この場を借りて久泉氏に感謝したい。

5 塚田孝雄『シーザーの晩餐―西洋古代飲食綺譚』時事通信社（一九九一）、「第一章ローマの繁栄と市民生活」。七〇頁。
6 正式には『*Vitae Diversorum Principum et Tyrannorum a Divo Hadriano usque ad Numerianum Diversis compositae*』と
7 う。「紀元前一七七年に即位したハドリアヌス帝から約一七〇年間にわたるローマ皇帝たちの生涯を綴ったラテン語の伝記集」
8 （『ローマ皇帝群像』凡例）である。内容的には、スエトニウス『ローマ皇帝伝（*De Vita Caesarum*）』の続編にあたる、と
9 も言える。

この注解で『ギリシア・ローマ故事辞典』とされているのが、『*Dictionary of Greek and Roman Antiquities*』である。また
『漱石の蔵相中にある』とされる『古代ギリシア・ローマ伝記神話地理辞典』とは、『*A Classical Dictionary of Greek and Roman
Biography, Mythology, and Geography*』である。

8 塚田、前掲書、四一〇頁。

9 *A Dictionary of Greek and Roman Antiquities*, edited by William Smith (Third American Edition) Carefully revised and
containing numerous articles relative to the botany, mineralogy and zoology of the ancients by Charles Anthon, LL.D.
Professor of Greek and Latin languages in Columbia College and Rector of the Grammar School (Harper & Brothers, 1843),
p.747. このアメリカ版（1843）を参照したのは、塚田氏が挙げた一八五六年版を見ることができなかったからである。なお、
「クジャク」の項は、『古代の人々の動物学』との関連で校訂者が付け加えた可能性も考えられる。また、『*Dictionary of Greek
and Roman Geography*』では、「クジャク」にかかわる見出し語そのものがない。

10 *The Natural History of Pliny* (Bohn's Classical Library), n. d., Vol. V, p.413.

11 Ibid. なお、この脚注にある「ランプリディウス」は『ローマ皇帝群像』中「エラガバルス伝」の執筆者である。ただし、この
記述中の「ビバリ」は『ローマ皇帝群像』では「ナイチンゲール」と、また「癩痢」は「疫病」となっている。原文では、
それぞれ「*Iuscinarum*」および「*pestilentia*」である（*The Scriptores Historiae Augustae* II [Loeb Classical Library],
p.146）。こまごまの「訳注」は、究極的には *Historia Augusta* に依っているのであるが、細部における正確さを欠いている。

- 12 注釈者の誤解か、あるいは注釈者の参照した資料に誤訳があったのではないか。
- 13 「ヘリオガバルス（正確にはエラガバルス）は彼が神官を務めていた神の名で、彼の呼び名ともなったが、公的な記録にはこの名は現われない。』『ローマ皇帝群像2』二八三頁、訳注（2）。
- 14 ただ、*A Dictionary of Greek and Roman Biography and Mythology*, ed. William Smith (AMS Press Inc., New York, 1967) には、*“Had he [Elagabalus] confined himself to the absurd practical jokes of which so many had been recorded: had he been satisfied with supping on the tongues of peacocks and nighingales...”*（イタリックは塚本）という記述がある。これ以上例は挙げないが、スシスの編纂に関わる辞典類では、同一の人物についても版によって記述内容にはかなりの変化がある。
- 15 Cooper: *A Biographical Dictionary*, Bell (1992). Brewer: *Dictionary of Phrase and Fable*, Cassell (1896)
- 16 中野定雄他訳『プリニウスの博物誌』第一巻、雄山閣（昭和六一）、「四四三頁。
- 17 中川芳太郎『英文学風物詩』研究社（昭和八）、「六九二頁。
- 18 Scott: *Kenilworth*, Routledge (Sixpenny Edition) n.d., p.134.
- 19 Tennyson: *Gareth and Lynette* Macmillan (1893), p.27. 1) 前後は *“Then half-ashamed and part amazed, the lord / Now looked at one and now at other, left / The damsel by the peacock in his pride.*（イタリックは塚本）”となっている。要するに「領主は（中略）尾羽を広げたクジャクの傍らにこの乙女を置いたまま立ち去った」ということで、プロット上も語法上も、なんら問題とするべきところはない。漱石が下線を引いたのは、「尾羽を広げたまま（食卓に置かれた）クジャク」そのものに注目したからである。
- 20 例えば、『新英和大辞典』研究社（一九八〇）参照。ただし、普通の学習辞典程度のものにはこの語義は収録されていない。
- 21 『漱石全集』「注解」ではこれを「サスキアという自分」としているが、「放蕩息子 の 酒宴」とする説もある。
- 22 スエトニウス『ローマ皇帝伝』（下）岩波文庫（一九八六）一一八頁。
- 同書、一五二頁。

同書、一五五頁。

Seneca: *Moral Essays* (Vol. II). With an English Translation by John W. Basore. (The Loeb Classical Library) Harvard Univ. Press (1958), p.448.

金子三郎編『記録―東京帝大一学生の聴講ノート』辞游社（平成一四）、三五八頁参照。

この章には、例えば “Gladly would he (=Nero) raze the city (=Rome) to the ground or destroy it with fire.” とか “He (=Nero) would fain exhibit himself in the Olympic games, as a poet with his verses on the burning of Troy...” (ペタリニクは塚本とく、言葉が見られ⁸) Steniewicz: *Quo Vadis*. Trans. by S. A. Bimson and Malevsky, Routledge (1901), p.273.

Ibid., p.28.

Ibid., p.303.

Ibid., p.77.

Ibid., p.221.

Ibid., p.357.

Ibid., p.463.

『猫』における「不対法」については、塚本『吾輩は猫である』における諸問題（『専修大学人文科学年報』第三七号（二〇〇七年三月）参照。

小宮豊隆『夏目漱石』（二）岩波書店（昭和二九）、一〇五頁。

江藤淳『夏目漱石』講談社（昭和三五）、二四頁。

同書、六四頁。

塚本『漱石と英文学』（改訂増補版）彩流社（二〇〇三）、第二章および第四章参照。